

～育む～

# 7 “雪あかり”の街



田村 公一  
TAMURA Kouichi

西和賀雪あかり実行委員会事務局  
西和賀商工会経営指導員

雪深い東北の温泉地に毎年「町おこし」としてろうそくを灯したイベントがある。20年以上も続くこのイベントはとても美しく暖かい。それはろうそくの灯りだけではない。地元の人々の繋がりや実行関係者がより一層の灯りを強くしている。その“雪あかり”に取り組む人々の思いとは……。

## 西和賀町の概要

西和賀町は岩手県の南西部にあって、秋田県に接し、和賀岳や南本内岳、奥羽山脈に囲まれた盆地です。総面積は590.78km<sup>2</sup>で、東西に20km、南北に50kmの広がりがあり、約84%が山林原野で農耕地はわずか4%となっています。日本海型気候に属し、年平均気温8.9℃と冷涼で、年間降水量は約2,000mm、積雪は平年2mに達し、特別豪雪地帯に指定されています。

現在は稲作と花卉（鑑賞のために栽培する植物）を組み合わせた複合経営の農業と、温泉を主体とする観光関連業が基幹産業となっております。温泉のある駅「ほっとゆだ」や東北初の砂風呂「砂ゆっこ」、鉱山の坑道をイメージした「穴ゆっこ」など、特徴のある温泉施設が有名で、ご存知の方も多いのではないかと思えます。

西和賀町は平成17年11月、「温泉を核としたまちづくり」の湯田町と「生命尊重のむらづくり」の沢内村が合併して誕生しました。“雪あかり”は旧湯田町で平成元年にスタートし、町村合併後は旧沢内村までエリアを広げ現在に至っております。

## 湯田町と「雪」

湯田町は冬になると、シベリアから吹き降ろす冷たい空気が日本海でたっぷり水分を含み、それが奥羽山脈に沿って上昇し、この麓に位置する当

地域に非常に多くの雪を降らせます。現存する記録の最大は、昭和49年の積雪3m68cm、降雪量16m61cmです。この3mを超える積雪とは、一般住宅では2階から出入りしたり、電話線を跨いで歩けるようになります。

西和賀町が、県内ではもちろん東北でも有数の豪雪地帯と称される所以です。西和賀の対外的なイメージは、まさに「雪」です。

## “雪あかり”とは

このような地域で、毎年2月に“雪あかり”というイベントを開催しております。“雪あかり”とは、「雪像」や「ミニかまくら」などを造り、その一部をくり抜きその中にろうそくを灯して楽しむもので、雪の冷たさや白さと、ろうそくの暖かいオレンジ色の炎が何とも言えない雰囲気を出し、見る人の心を和ませてくれます。

最近では、北海道小樽市や岩手県盛岡市などの他、あちらこちらで開催されるようになってまいりま



写真1 テーマ「雪あかりのむら」



写真2 ミニかまくら



写真3 翼を持った天馬

したが、“雪あかり”は当町独自の発想と命名であり、“雪あかり”発祥の地と自負しているものです。

## 湯田温泉峡雪まつりの開催

湯田町は温泉の町として、古くから鉱山労働者や県内外の農家の人の湯治場として賑わってまいりました。それが、昭和49年の豪雪の際は、鉄道は全面運休、陸の孤島と化し、自衛隊が二度にわたり出動するなど、大変な被害を受けました。この豪雪は連日マスコミでも報道され、観光地として最悪のレッテルを貼られてしまいました。観光を重要な基幹産業と位置付けている湯田町としては重大問題でした。

このことから、翌年には、何とか冬の湯田温泉峡の悪評を払拭し、再度温泉客を誘致しようと、当時の観光関係団体を中心に実行委員会が組織され、第1回「湯田温泉峡雪まつり」がスタート致しました。

湯田温泉峡雪まつりは、町営スキー場に隣接する特設会場で、行政区ごとに札幌雪まつりの小型版のような雪像を作り、その出来栄を競ったり、雪上ステージでの郷土芸能披露、広場での雪上運動会と、まさに町民総出で雪を楽しむイベントでした。模擬店も軒を並べ、夜には花火の打ち上げも行われ、大変な賑わいを見せました。真冬の雪国では、花火の光が真っ白い雪に反射し大変すばらしいものです。

## 価値観の変化とマンネリ化

しかし、それから10数年。10数年という歳月は長く、除雪機械などの普及により雪国の生活環境も大

きく変わりました。少々足を伸ばせば、壮大なスケールで開催されている小岩井の「岩手雪まつり」や、日本最大の「札幌雪まつり」にも簡単に行ける時代になりました。

人々の価値観も大きく変わりました。当然、観光客も年々減少してまいりました。

雪像作りにおいても当初はすべて人力で行い、特に苦痛とは感じていなかったものが、機械の普及とともに、機械で雪を積んであげないと雪像を作ってもらえない。さらに、賞品や賞金も年々増額しなければ参加団体を確保できない。ついには、雪を積むだけではなく、積んだ雪を機械で削ってあげる始末。しかし、それでも参加団体が減っていく。最終的には、モデル雪像と称して有償で作って頂くという状況にまで陥りました。

観光客は年々減少する。参加者も年々減ってくる。湯田温泉峡雪まつりは、苦痛しか残らない事業と化し、イベントそのものの意義さえ見失われ、お荷物のイベントとなりました。そのような状況に、さらに追い討ちをかけるように、雪国の真冬の屋外イベントでは、期間中猛吹雪に見舞われることも少なく、折角の努力も水泡に帰すことも度々でした。

## “雪あかり”誕生

毎年暮に、次回の湯田温泉峡雪まつりの事業計画や予算を決める実行委員会が開催されておりましたが、このような悪循環の中、昭和63年の実行委員会では、結局新たなアイデアもなく、実施するか中止するかの方向性をも示せず流会となってしまいました。一度始めたイベントを止める難しさも痛感しました。

そして、まさに背水の陣ともいえる状況の中で、「継続するには方向転換しかない」ということで提案したのが“雪あかり”でした。



写真4 ミッキーマウス



写真5 キティーちゃん



写真6 トトロとねこバス





写真7 ハート 写真8 タージマハル寺院 写真9 雪像に集う見学者

### “雪あかり”の4つの視点

湯田温泉峡雪まつりの経験から、冬のイベントとしても一度原点に帰り、次の4つの視点から検討を加え“雪あかり”が生まれました。

- ① 参加者が楽しむこと
- ② 湯田町ならではの地域性があること
- ③ 独自性があること
- ④ 雪のイメージアップ

1番目は、雪国に暮らす地域住民が「雪を厄介者扱いするだけでなく、子供の頃のように、雪があること、雪国に住んでいることを楽しみましょう」ということでした。

2番目は、イベントには地域性が必要であることです。全国どこでも開催出来るイベントでは意味がありません。湯田町ならではの湯田町だから出来るイベントに拘ることでした。拘ったのは、「雪」と「温泉」でした。

3番目は、独自性です。今や情報化の時代と言われ久しいですが、観光客は何か面白いものがないかと、常にアンテナを張り巡らしています。つまり、欲求不満でいると考えても良いのではないかと思います。如何に観光客に目を向けさせるか。それは規模や予算だけではなく、やはり独自性が必要であると考えました。

おいしいキャラメルを買うためだけに100kmも移動する時代です。他の模倣ではない独自性のあるものに、人は移動すると考えております。

そして独自性のあるイベントは、何処にも手本がなく、自ら作り育て上げていかなければならないという実施する側の緊張感・使命感があります。この緊張感・使命感の連続がまたイベントに命を与えていると思っております。イベントを育てるのは、何か子育てと共通するようにも思います。

4番目は、雪または雪国のイメージアップです。雪国に住んでいる人自体、雪さえ降らなければという人もおります。しかし、雪のすばらしさも、また知っていません。そのすばらしさを全面に出し、雪の降らない地域



写真10 龍の製作風景



写真11 ろうそくが灯された龍

の人々が持つ雪に対するイメージを変えたいということです。実際は、いくらかでも雪の積もる地域の人々のほうが、雪に対する嫌悪感が強いようです。

どんな地域にも、その地域独特の気候風土があり、他所から見ると羨ましいような自然条件に見える地域も、そこに住んでいる人にとっては、決して良いことばかりではない筈です。雪国は逆に、決して悪いことばかりではないのです。日本全国を見れば、雪の積もる地域は希少です。

### “雪あかり”の概要

このような経緯を経て、平成元年“雪あかり”がスタートしました。メイン会場を持たず、各家庭や団体の思い思いの場所に作って頂くことから、開催エリアは町内全域。雪国



写真12 龍の前で太鼓の披露



写真13 2kmにおよぶ「灯かりの小径」 写真14 大作「宝船」 写真15 駅のホームにきのこが!

の温泉地の情緒を演出する風物詩として展開を目指し開催されております。“雪あかり”は町民が各家庭で楽しむものと、それぞれの地域や企業・団体などで楽しむ団体参加の“雪あかり”の2本柱で開催しております。

各家庭で楽しむ“雪あかり”は、参加条件は一切ありません。「是非ご家族で個性溢れる雪あかりを製作し、楽しんで下さい」ということで希望世帯を募集します。希望世帯には、実行委員会よりろうそくが無償で提供されます。今回の「雪あかり2009」では、町内全世帯の約3割に達する700世帯から参加頂きました。

“雪あかり”の開催時期になりますと、それぞれの家庭の玄関先で、爺ちゃん婆ちゃんとお孫さんのコンビや、親子で“雪あかり”を製作している光景が良く見られます。そして、その周りには近所の人々が集まり、出来栄談義に花を咲かせている姿もよく見受けられます。“雪あかり”を介在し、地域住民が仲良く元気に、そして活気に満ち溢れます。

ぽつんぽつんと各家庭の玄関先の“雪あかり”を眺めていると、その家庭の幸せな家族が目に見え、見ている方も幸せな気持ちになります。

一方、団体参加の“雪あかり”も広く参加希望を募ります。参加団体は、町内企業をはじめ官公庁・行政区や公民館などの地域団体、福祉施設、学校、PTAなど様々です。今回の「雪あかり2009」では、町内55団体に参加頂きました。

団体参加の“雪あかり”は、非常に精巧に作られた大型の「雪像」もあれば、峠を利用し約2kmにも及ぶ「灯かりの小径」など、それぞれ工夫を凝らしスケールも大きなものが多く、見るものを魅了します。観光施設では、お客様の出迎え用として製作されているものもあります。

参加目的も、企業PRあれば、従業員の福利厚生の一環として、また、地域住民の一体感の醸成を目指すもの、観光客を集めて団体の運営資金を稼ぐなど様々ですが、実行委員会から製作を依頼するこ

とはございません。逆に実行委員会で提供するろうそくの不足する分を、別に購入して参加頂いている状況です。

2月上旬の2日間、西和賀全域は約15,000本のろうそくで彩られます。ろうそくの灯りには、電飾にはない「ゆらぎ」や「まばたき」、「あたたかさ」があります。それが雪国の温泉地のイメージと相俟って、冬の西和賀の「風物詩」や「代名詞」となって歩み始めております。



写真1 雪あかりのパンフレット

### 応援メッセージ

“雪あかり”に方向転換した当初、多くの皆さんから激励の投書などを頂きました。「雪には恐ろしいイメージもあるが、静寂で暖かく、清純な美しさを感じる。これを最大限利用して『雪あかり祭り』とした労作に胸がジーンと熱くなり涙がこぼれた」「どの家々も小さな灯かりがゆらゆら揺れて、雪国でしか見られないすばらしい雪あかりを見て心がほのほのとしました」「雪あかりはまだヨチヨチ歩きの間段階だが、回を重ねるうちに次のステップの方向が見えてくるだろう。焦らず、じっくり取り組みたい。継続は力なりと言われるが、継続している中で新たな展開を考え、地域の振興を果たしてほしい」などなど。

このような応援メッセージを背に、“雪あかり”は平成17年11月、「いのちと健康を守る」沢内村と合併し西和賀町が誕生したのを機に、「雪国の温泉地を演出する真冬の風物詩」というコンセプトに、新たに「いのち」「ふるさと」「スローライフ」のキーワードを加え、西和賀全域で新展開を図っております。是非一度ご覧頂きたいと思っております。